

序

精神医学の歴史を一瞬のうちに要約するなら、200年前に Pinel が幕を開け、100年前に Kraepelin に収束したということになる。20世紀の精神医学の骨組みを形成していたのは、早発性痴呆（統合失調症）と躁うつ病（気分障害）を2つの柱とする Kraepelin の体系だったとあってよいだろう。本書はこの2つの疾患について、その精神病理の解明に挑んだ先人たちの苦闘の足跡である。

では、Kraepelin の疾病分類学の正しさは、何によって保証されていたのだろうか。それは透徹した記述の精神によってである。現代のわれわれの描写力が到底かなうものではない。それにとどまらず、かつての精神科医たちは、この確かな記述を足場として、さらに一步、病理のなかに分け入ろうと試みた。それが精神病理学というものだったのである。

この営みを支えたのは、「他者への想像力」とでもいうべきものである。当時の精神科医たちの眼前には、こちらの理解を超絶したような現象が生起していた。彼らはそれを記述し、命名し、そして分類したのだが、それにとどまらず、理解の糸口を求めて果敢に挑んだ。そこでは単に知的に理解することだけが目指されていたのではない。なんとかかかわれないものか、治療のための導きの糸をたぐり寄せることができないものか、という熱い思いと一体となった営みだった。もしかしたら、若い世代にはピンとこないことかもしれない。

20世紀を代表する思想家の一人である Lévi-Strauss (1908~2009) は、最晩年にフランス・メディアのインタビューに答えて、「私が愛した世界は15億の人口だった。60億人が暮らす今の世界は、もはや私とは無縁の存在です」と語った。老いの繰り言といってしまうのは簡単だが、この傑出した民族学者の示したノスタルジーのなかには、人類への重大なメッセージが含まれている。彼の言う「60億人が暮らす今の世界」とは、異界が消滅し、野生の思考が枯れ果てた21世紀の風景である。もはや彼の知的想像力を駆り立てる対象はない。同じようなことが精神医学の領域でも起こっていないだろうか。

たしかに、かつての分裂病も躁うつ病も、その名称が古色蒼然と感じるほどに、多くの病いは軽症化した。そして ICD や DSM など、公認の簡便な診断マニュアルが手元にある。「わからない」ということが、臨床の現場から姿をくらましたかのようにも思える。

もし、このことが、精神疾患という災禍が解消しつつあることの徴候であれば、それは歓迎すべきことである。実際、ボーダーレスという言葉などが示すように、正常と異常の区分けは従前と比べてはるかに不明瞭なものとなった。だが、それは単にわからなさに蓋をしてすましているだけのことではないだろうか。患者の示す異常な事象に、できあいの用語を当てはめ、お仕着せの基準を適用して、それでわかったとして切り上げる。こうした臨床風景が当たり前ようになってしまっている。

かつて土居健郎は、精神科臨床のエッセンスを、いかにして「わからない」という感覚を磨くか

にあると簡潔に説いた。精神科医の素養とは、わからないことに驚き、そこにプロとしての関心を向け、そのわからなさを見失わないことである。なぜなら、診る側が「わからない」と感じるところにこそ、患者は苦悩を宿しているからである。

もちろん、われわれは「わかる」ことを目指さなければならない。ただわからなさに手をこまねいているばかりでは立ち行かない。しかし「わかる」はつねに「わからない」と背中合わせになっている。なぜなら、物事の理屈がわかればわかるほど、わからないこともまた増えてくるはずだからである。

ダニエル・キイスのSF小説『アルジャーノンに花束を』のなかで、知的障害者のチャーリー・ゴードンは、脳外科手術によって天才的知能を獲得する。そして、乾いた海綿が水を吸うように、知のあらゆるジャンルを渉猟しはじめた。だが、周囲の熱狂をよそに、チャーリーは次のように慨嘆するのである。「学ぶということはなんと奇妙なことか。奥深く分け入れば入るほど、存在すら知らなかったものが見えてくる。ほんのしばらく前まで、私は愚かにも、すべてを学ぶことができると考えていた。いまの私は、せめてその存在だけでも知ることができたら、そしてそのほんのひとかけらでも理解できたらと願う」。

臨床家が「もうわかった」と切り上げたとき、退化がはじまる。それはわからなさを囲い込んでしまっただけである。とりわけ昨今問題となるのは、脳科学であるとか、統計的エヴィデンスといったものにたじろいで、そこに真理の場を委ねてしまっていることである。臨床知など、こうしたモンスターのの前では、はかなく消え入らんばかりにみえるかもしれない。だがそれは本末転倒した事態である。なぜなら、それらの科学は、本来、臨床知に奉仕すべきものだからである。そして天才チャーリーと同様、脳科学であれ、統計解析であれ、第一線の科学者たちは、わからなさを前に苦闘しているはずである。

本書のなかには、〈わかる—わからない〉がせめぎ合う地点から生み出された論考がひしめいている。もちろん、読み進めるのはそれほど容易なことではない。だが、それで敬遠するようでは、患者の苦悩に歯が立たないだろう。

おそらく、多くの臨床家が、簡便にわかることに対して、そろそろうんざりしはじめている。もう一度臨床の現場から知を汲みあげ、われわれの器を鍛え直すために、ここに先達の残した苦闘の痕跡を再び世に出す次第である。

2013年1月

内海 健